
日本ロシア文学会

関東支部報

No. 22

2004. 9.1

〒186-8607 国立市中 2-1 一橋大学社会学研究科 中島由美研究室気付
日本ロシア文学会関東支部事務局 cs00296@srv.cc.hit-u.ac.jp

2004 年 5 月 29 日（土）、恒例の関東支部主催春季研究発表会が、一橋大学にて開催されました。今回は 8 名の都内各大学の大学院生による研究報告があり、活発な討議が行われたほか、一橋大学名誉教授中村喜和氏より、「私のロシア語修行時代のことなど」と題する貴重なお話を伺いました。50 名を超えるさまざまな世代の参加者が一同に集い、引き続き懇親会に場を移し親交を深めることができました。なお研究会に先立ち、支部運営委員会が開催され、井桁貞義支部長はじめ各大学の代表により、今後の支部活動のあり方などについて、さまざまな検討が行われました。

発表者		[司会者]
中神美砂（東外大）	E.P. ダーシコヴァと 18 世紀ロシア社会	[金澤美知子]
中澤朋子（早大）	B.K. トレジアコフスキ『ピョートル大帝の死に寄せる哀歌』の旧版と新版における動詞について	[栗原成郎]
石川あい子（一橋大）	パン関連語彙の分析からみたロシアの民衆生活	[伊東一郎]
角田耕治（早大）	プーシキンとマゼーパ伝説	[中村喜和]
白村直也（東外大）	所謂「児童学批判」とろう教育の関連性に関する一考察	[坂内徳明]
ミレン・マルチェフ （一橋大）	インターネット掲示板における表記の問題	[臼山利信]
宮川絹代（東大）	ブーニン研究の可能性を求めて	[貝沢 哉]
近藤大介（一橋大）	ドストエフスキー『貧しい人々』とロシア・センチメンタリズム	[井桁貞義]
五島和哉（東大）	ドストエフスキー病気哲学の成立	[井桁貞義]

目 次

いげた さだよし 井桁 貞義	IT 時代のロシア文学研究	1
なかがみ みさ 中神 美砂	E.P. ダーシコヴァと 18 世紀ロシア社会 ー ダーシコヴァの教育問題に関する考え方をめぐって ー	2
なかざわ ともこ 中澤 朋子	B.K. トレジアコフスキ『ピョートル大帝の死に寄せる哀歌』の 旧版と新版における動詞について	6
いしかわ 石川 あい子	パン関連語彙の分析からみたロシアの民衆生活	9
つのだ こうじ 角田 耕治	プーシキンとマゼーパ伝説 ー『ポルタヴァ』(1829) のエピグラフ解釈 ー	12
はくむら なおや 白村 直也	所謂「児童学批判決定」とろう教育の関連性に関する一考察	15
ミレン・マルチェフ	インターネット掲示板における表記の問題 ースラヴ語の場合 ー	18
みやがわ きぬよ 宮川 絹代	ブーニン研究の可能性を求めて	22
こんどう だいすけ 近藤 大介	ドストエフスキー『貧しい人々』とロシア・センチメンタリズム	25
ごしま かずや 五島 和哉	ドストエフスキー病気哲学の成立 ー「意識は病である」ことの意味 ー	28

本号に掲載された研究発表題目のいくつかのものにつきましては、発表者の希望により一部
変更が加えられ、発表当日のものと若干異なっていることをお断り申し上げます。(事務局)

IT時代のロシア文学研究

日本ロシア文学会関東支部長
井桁貞義

学会会報でご案内のように、今年の春から、日本ロシア文学会のホームページの運用が実質的に開始されました。そこには「支部活動」のページもあって、わたくしども関東支部の活動も記録されています。

今年、2004年はちょうどチェーホフ没後100年にあたっており、学会ホームページもこれに関する情報が多く載せられています。学会主催、共催、協力の講演会やシンポジウム、催しものから、さらにリンクをたどって、たくさんの劇団のチェーホフ劇上演の情報なども知ることができます。あらためてチェーホフの文学が日本文化に与えた影響の広さと深さを実感することができます。

ところでこのホームページには「ものがたりロシア語ロシア文学」という欄が設けられていて、ロシア語やロシア文学の研究について、現代の動きや歴史的な出来事を読むことができます。掲載されている記事は現在まだまだ少ないのですが、それでもすでに若い研究者の知らない貴重な情報を得ることができます。そこから窺えるのは、日本のスラヴ文化研究、ロシア文学研究が世界の研究者グループの前に登場したのはようやく1970年代の末頃だったということです。今でこそ、外国で行われるシンポジウムや研究発表会への日本人研究者たちの参加はあたりまえになっていますが、その歴史は決して長いものではなく、最初は少数の熱心な研究者たちの手探りの努力によって拓かれた道であったことが分かります。

本年度の支部研究発表会の特徴の一つは、研究のテーマが非常に広がったこと。その意味で画期的でした。さらに、発表者がすでに外国との密接なコンタクトを持っていることも注目すべきことと感じられました。インターネットなどを使って、論文の添削をロシアの研究者に依頼する、ということも日常的に行われるようになりました。

情報への緊密なアクセスと共有、そのなかでのオリジナリティの深化という両方の作業が、これからの研究者に求められているのでしょう。

E.P. ダーシコヴァと 18 世紀ロシア社会

ー ダーシコヴァの教育問題に関する考え方をめぐって ー

中神 美砂

はじめに

ロシアの 18 世紀は、ピョートル大帝の西欧化政策と世俗化政策を発端に、西欧からの技術の導入や文化の流入により、社会が大きな変革を遂げた時代である。軍備、科学技術、行政システムから社会生活を彩る衣服、装身具、さらに貴族の子弟にフランス語と礼儀作法を仕込むための家庭教師にいたるまで、西ヨーロッパの人や物、ヒューマニズム思想などが堰を切ったようにロシアに流れ込んできた。

ロシア精神が西欧の虜になるほど西欧への熱中振りを示したのも、この時代の特徴である。啓蒙が進むにつれて、ロシアの西欧崇拜は弱まるどころかますます影響力を強めていった。

ロシア文化史家の Ю.М. ロートマンが「この時代の女性は、男性同様激しく変化する生活の流れに参加していたばかりか、そこにおいてはますます大きな役割を演じるようになっていたのである。そして女性自身もまた非常に大きな変化を遂げている」¹⁾と述べているように、女性に変化をうけいれ、個性を発揮した人間として生きることが可能になったのが女帝の世紀、啓蒙の 18 世紀ともいえる。

女性が 18 世紀に公的生活、つまり科学アカデミー院長職とロシアアカデミー総裁職について、活躍したのは女帝以外ではダーシコヴァしかいない。その活躍ぶりと知識の広さは、ストックホルムアカデミーやフィラデルフィア哲学協会会員などの会員であったこと、さらにプロシャのフリードリッヒ大王などのヨーロッパ王室関係者、ディドロ、ヴォルテール、アダム・スミスなど当時の著名な学者、文化人と直接交流をもっていたことなどからもうかがい知ることができる。ダーシコヴァが公職につき、活躍することができた最大の理由は、並外れて教養ある女性だったこと、当時の環境の中で自立した行動をとらせた根本である内面の自由と人格をもっていたからだ。

ダーシコヴァの人生を『回想録』から考察すると、公的生活と私的生活との時代に大きく分けることができ、それはさらにエカチェリーナ女帝からの愛情をうけていた時代、受けていなかった時代とほぼ一致する。しかしこの公的生活と私的生活とをつなぐ大きなキーワードがある。それが教育問題である。本稿では自分の経験から人格、個の確立における環境と教育問題の重要性を認識した彼女が、まず自分の子供の教育問題をどう考え、その後科学アカデミー院長、ロシアアカデミー総裁としてどのようにロシアの若者の教育問題にとりくむようになったのか、そのことはその後ロシアにどのような影響を与えたか、18 世紀におけるダーシコヴァの位置を、歴史的背景、社会・文化背景をふまえて検討してみたい。

また本稿ではロシア女性史の専門家である Н.Л. Психарьова が「家庭生活を含め日常生活における変化は、特権階級で教養ある女性から、つまり上から始まった」²⁾と述べているようにダーシコヴァを考察するにあたり、その対象を上流貴族の階級にしばって言及することを最初

1) Y.M. ロートマン『ロシア貴族』 桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳 筑摩書房 1997 年 58 頁

2) Пушкарева Н.Л., Частная жизнь русской женщины: невеста, жена, любовница (X-начало XIX в.), М., 1997, с.255.

に断っておくこととする。

本論

E.P. ダーシコヴァ (1743-1810) は、政治的にも経済的にも名門の上流貴族ヴォロンツォーフ家³⁾ に生まれ、エリザヴェータ女帝 (在位 1741-1761) からアレクサンドル一世 (在位 1801-1825) の 5 人の皇帝の治世を生き抜いた女性である。その中でも卓越した個性を発揮したエカチェリーナ二世 (在位 1762-1796) は、ダーシコヴァの人生に極めて大きな影響を与えた。

上流貴族の一員として生まれたそれ自体が、ダーシコヴァに個性を伸ばす、教育をうける可能性が与えられていたことを示した。しかし母親が早く亡くなり、父親が子供に関心が薄かったため、4 歳の時、つまり子供の性格や興味が形成される子供時代をダーシコヴァは、エリザヴェータ女帝の副宰相だった叔父の M.H. ヴォロンツォーフの元に、教育をうけるために預けられた。その教育について『回想録』の中で「4 つの言語を知っていました。特にフランス語は完璧でした。・・・上品な作法も優雅に振舞うこともできました。私達はすばらしい教育を受けた女子でした。しかし、知恵と心の発達のために何かなされたのでしょうか？何もしませんでした。」⁴⁾ と述べているように、その当時の教育が表面的で、女性個人の人格や人間性の向上のための教育ではなかった。

18 世紀の女子教育を含めた主たる貴族の子弟の家庭教育の手段は、主として外国人の家庭教師によるものだった。しかも 19 世紀の女性史家の B.O. ミフネヴィチが「雇いの教育者達は、疑わし教育者で、驚くことに子供を発達させるよりも、しばしば子供たちを墮落させていた」⁵⁾ と述べ、外国人による家庭教育の質の悪さを指摘しているように、外国人による家庭教育の問題は、後にダーシコヴァが自分の子供の教育の場を探す西欧旅行と大きく関係することになる。

ダーシコヴァ自身が人格を確立したきっかけになったのが 13 歳の時にかった麻疹であったことが『回想録』からわかっている。幼い時から愛情に薄かったダーシコヴァは身内から隔離され、孤独の中で自己と向き合うことで、自己概念ができあがり、自我となった。そして読書の中に心の平静さをみつけ、一人で物事を決めるという他人を寄せ付けない強い、独立心に富んだ性格を生むことにつながった。

ダーシコヴァが「本当に私は自分自身で教育を得たいという気持ちがとても強く、私は手に入った本はほとんど飲み込みそうになるぐらいまで読みました」⁶⁾ と述べているように、ダーシコヴァは主体性をもって教育を自ら受けるのではなく、求めた。それが人格の確立、個性の確立の上で、読書を含めた教育の重要性とその可能性を自覚することにつながった。その自覚は後に科学アカデミー院長時代に自分の活動をロシアの若者の啓蒙・教育分野、出版分野に集中させることにつながった。

さて人格の形成の上で、教育の重要性を認識したダーシコヴァは、「16 歳で私は母になりました。・・・娘が一言も発することができないうちに、私は完全なる教育を与えることを考えました」⁷⁾ とあるように、子供が生まれてすぐにわが子に対する教育問題にとりくんだ。ダーシ

3) Огарков В.В., Дашкова, ее жизнь и общественная деятельность, СПб., 1895, / Биографические повествования, Челябинск, 1995, с.209./

4) Дашкова Е.Р., Записки 1743-1810, Калининград, 2001, с.7.

5) Михневич В.О., Русская женщина XVIII столетия, М., 1895, / 1990, с.63/

6) Дашкова Е.Р., О смысле слова «воспитание», сочинение, письма, документы, М., 2001, с.260.

7) Дашкова Е.Р., О смысле слова «воспитание», сочинение, письма, документы, М., 2001, с.219.

コヴァは息子の教育のために第一回目の西欧旅行（1769－1771）と第二回目の西欧旅行（1776-1782）を二人の子供をつれておこなった。この西欧旅行はダーシコヴァの経験からロシアでは家庭教育を十分受けさせることができないという考えからきているものであり、自分が考えていた教育論を実践するための旅でもあった。しかしこの二回の西欧旅行はダーシコヴァにとっては様々な学者や王宮関係者などと会うことで自己啓発の場所となった。また西欧で見たロシア人貴族の子弟の生活をみるにつけ、西欧に特にフランスに強い憧憬をもつ若者達の傾向に大きな危機感を抱くことになった旅行でもあった。20 世紀の優れた哲学者である B.B. ゼンコフスキーが「啓蒙が進むにつれ、西欧崇拜は弱まるどころかますます深まり、影響を強めていった。・・・西欧をしたことによって西欧に対するそれまでの態度が分化させられたのである」⁸⁾と延べているようにダーシコヴァは西欧を知ることによって、西欧のよさを認めながらも、ロシア語を含めてロシア独自のものを大切にしようとする彼女の教育の考えの基礎が作られた旅行でもあった。それはダーシコヴァの視野が自分の子供の教育からロシアの若者の教育問題へと移るきっかけとなった旅行でもあった。

西欧旅行から帰ってきたダーシコヴァを待っていたのは、思いがけないエカチェリーナ女帝からの 1783 年の科学アカデミー院長の任命であった。そして同年にはロシアアカデミー総裁にも任命され、兼任することになった。ダーシコヴァが 1783 年から 1796 年まで公式に職についていた間に積極的に力を注いだ分野は、経営活動、科学啓蒙活動、出版活動であった。それはダーシコヴァが教育の人間の人格に与える影響力を理解していたから、教育の可能性を信じていたからであった。また彼女の大きな目標は、西欧の虜となっていたロシアの若者達にロシア人としての国民意識をめざめさせることであった。ダーシコヴァのスローガンともいえる「ロシア人はロシア人たれ」がそれを物語っている。

読書の重要性を認識していたダーシコヴァは出版活動も活発におこない、ロシア語の美しさとロシア文化を伝えるために『ロシア語愛好者の友』『新しい毎月の作品』などの雑誌の発行をおこない、この中で『教育という言葉の意味について』、『徳について』、『ロシア人はロシア人たれ』などのロシアの若者の教育に関する作品をロシア語でたくさん発表している。彼女の教育の考え方は若者の教育システムということで、科学アカデミー総裁時代に公開無料講座を開催したことで、実現されることとなった。

結論

このようにダーシコヴァは、エカチェリーナ女帝がめざした愛国主義にとんだ「新しい種類の人間」を育てるために、教育問題の重要性と可能性を唱え続けた。

しかしダーシコヴァは決して女性のための教育問題に取り組んだのではなかった。むしろ、国家に使える愛国者たる人間を育てる若者の教育の問題にとりくんだ。彼女は 18 世紀の家父長制度がまだ残っている時代の女性である。ダーシコヴァは一般的に女性についてきわめて開明的な、フェミニズム的な女性権の拡張の考えを持っていたわけでは決してないし、自分が弱い性である女性であることをしっかりと自覚していた。ここに家父長制度が残るロシアの 18 世紀に生まれた彼女の矛盾があり、反対に農奴制が残っていたロシアの 18 世紀という時代が彼女を生んだと

8) V. ゼンコフスキー 『ロシア思想家とヨーロッパ』 高野雅之訳 現代思潮社 1973 年 17 頁

いえる。

さらに重要なことは、男女を問わず、一人の自立した若者を、人間をつくり上げることが、当時のロシアがめざしていた西欧化の基礎である点である。すなわち、ダーシコヴァはすでに 18 世紀後半から 19 世紀にかけて西欧文化との比較からロシアの自立性と民族性を模索していた。これは、ピョートルの西欧化とクリミア戦争以降の近代化政策を有機的につなぐ、ファンヴィージンらが目指したと同じすぐれた 19 世紀的志向であったといえよう。

また人格の形成、人間の自立にかかわる教育の問題は、普遍的な問題である。特に現在のようなグローバル化、IT 化によって、社会が大きく変革している時代において、それは重要な意味をもつ。また最近ロシアではダーシコヴァの『回想録』や研究書をはじめとして、18、19 世紀の貴族文化の担い手にかかわる研究書などが盛んに出版されたり、復刻版がだされたりしている。これはロシア人による近代史の見直しという歴史的・精神史的価値をもつ動きであると同時に、ソビエト連邦崩壊により精神面での支えを失ったロシア人が貴族文化を肯定的に評価し、ロシア再生のきっかけを見出そうとする姿勢でもある。その中でもダーシコヴァがとくに重要であるとした人格形成にかかわる教育問題は、その現代的意義を失っていないと考えられる。

B.K. トレジアコフスキイ『ピョートル大帝の死に寄せる哀歌』の 旧版と新版における動詞について

中澤 朋子

1725 年に B.K. トレジアコフスキイによって書かれ 1752 年に自身の手によって書き直された「ピョートル大帝の死に寄せる哀歌」を題材としてとり、トレジアコフスキイがどのような文法体系（「動詞」にまつわる形態論的特徴）と語彙（「ミクロテクストロギア」的分析として諸品詞のなかから「動詞」）の用いられ方が旧版・新版においてどのように変化しているかを見てみることにする。

まず文法のレベルとしては形態論と統語論を取り上げ、それらの古語的用法と新しい用法を詳細に見てみる。形態論的側面から動詞の古語的用法を具体的に見るにあたって取り上げた形はアオリスト、不定形、一人称単数現在形、二人称単数現在形、形動詞である。アオリストにおいて、興味深いのは "рече" という単語である。旧版において、この単語は二度用いられているが、そのうちの一度、第四連六行目において見られるこの単語は、新版では "рекла" という新しい過去形の形に替えられている。ここでの主語は "Паллада" で、「ピョートルが亡くなったことに世界がどのような状態になっているか」ということを描いているシーンで、アオリストの形をとっている "реци" は、それ自体高文体に属する語彙であると考えてよいだろうが、そのアオリストの形のみでは「性」を表し得ないため、その行為を行った主体が「男性」なのか「女性」なのかは浮き彫りにはならない。ところが "рекла" という新しい形の「過去形」が用いられることにより、そのことを「言った」のがここでは "Паллада" という「女性」の「主体」であることが明確に指し示されるわけである。またこのことは、例えば作詩法的観点から見てみても興味深く、すなわちこれらの形の母音の数を数えてみると、どちらも 2 つであり、作詩法的観点から見てみればこれらどちらの単語を用いても一行の数を揃えるのには全く問題がないわけだが、トレジアコフスキイはあえて新しい形の過去形 "рекла" を用いている。これは、詩を書く際に作詩法に彼が作詩法にのみ注意を払いながら詩を書いていたわけではなく、形態論的特徴をうまく生かしつつその行為を行った「主体」を明確に指し示そうとしたことを意味し、そしてこの新しい過去形の形が用いられていることをみれば、18 世紀という時代のうちの約 30 年という期間でさえも、文学テキストにおける「言語」が激しい動きを見せていたことに改めて気付かされる。また、旧版において「アクセントのない "— ТИ" を用いていたが、新版ではこれらは全て取り除かれ、現代ロシア語と同じ "— ТЬ" という形の不定形が用いられている。このように、これら古い文法的な形は旧版においては用いられているが、新版の方では全く用いられていない。すなわち書き直した際の新しいテキストにおいて、文法における古典的なフォルマの使用をトレジアコフスキイは排除しているということができよう。新版の方においては現代ロシア語にも受け継がれてきているような形を用いている、ということである。また統語論的観点からみた場合もまた同じで、例えば 1725 年の哀歌においては独立与格が用いられている箇所があるが、1752 年の新しい哀歌においては一切用いられてはいない。また 18 世紀のテキストにおける迂言法の使用は、この時代の文学作品にみられる統語論的特徴のひとつとして有名であるが、この哀歌においては、旧版では一つしか認められないのに対して、新版においては非常に多く用いられるようになっている。

次に「ミクロテクストロギア」的分析として、旧版と新版を照合し、そのなかで用いられている語彙（動詞）の変化を見てみる。単語単語の類義語変更のタイプとして行った分類は1. 単語の保存（1a. 単語の厳密な保存、16. 語幹の保存または同語幹の単語の使用）、2. 異本（2a. 類義語への変更、26. 新しい意味をもつ単語への変更）、3. 削除と更新（3a. 削除、36. 更新）である。これと並行して動詞における意味論的な分類は1a「泣く」、16 その他の感情的な反応や作用（感情的・身体的な現象）、2. 思考と言語、3. 知覚、4. 位置と動き、5. 存在と不在、6. 叙法動詞である。これら二つの分類を踏まえながら個々の単語を一つ一つ並列対比させ、旧版と新版で語彙の変化をみる。1a「泣く」における（26）について、派生的な動詞は形態論的変更によって多用されていると考えてよいと思われる（завопил[···] → взревѣлъ, оплачу → залился слезами, заревели → зашумѣли）。このように動詞の語形成は、接辞法を保存することにより用いられており、さまざまな異本タイプのうちから特にトレジアコフスキイによって多用されているのは「動作を始める」という意味をもつ接頭辞 "воз—" である（восстенать、взречь、возопить）。16 その他の感情的な反応や作用（感情的・身体的な現象）を含めた動詞の意味論的な分類の（1.）においてはトレジアコフスキイはしばしば三人称単数現在形の動詞を用いており、多くは不完了体である。2. 思考と言語のグループでは、他のグループとの比較してみると、語彙群が保存されつつ、それらがなんらかの形で保存や変更（1a）、（16）、（2a）がなされているものが最も多く認められる。多くの動詞が、その接頭辞のみを変更していて、二度だけそれらは接頭辞のない形へと変更されており、すなわち、接辞法による語形成は保存されているが、他のより高文体な単語へと変更されているのだ（"из—"、"воз—"、"у—"。たとえば рекла → изрекла, вещала → возвѣщать, не исправлю → не справлю, скрасил → украсилъ）。興味深いのは、思考に関わる単語である動詞 "глаголати" が、新版では用いられていないことであり、その意味でさえも保存されていないことである。トレジアコフスキイはこの動詞を他の単語へと書き換えており、新版においては、最早われわれはその単語をどこにも見つけることができない。トレジアコフスキイはこの動詞を、語彙素だけでなく理解の面でも取り除いたということができよう。3. 「知覚」の動詞のグループに属する単語は、このグループの動詞のうちのそれほど多くない数（全部で14個のみ）は、動詞の諸グループのうちでも「叙法動詞」のグループとともに、合計数は最も少ない。このグループにおいて最も特徴的なものといえば、視覚のみで表現されているのではなく、聴覚という器官を使った動作の動詞へと替わっていることであろう。一つの動詞を除き、他の全ての動詞は「見る」や「聴く」などを意味するような単語になっており、すなわちここでは目と耳、二つの知覚の器官によって表現されているということである。これはおそらく新版においてトレジアコフスキイはアレゴリー的な人物像をより詳細に描こうと努めており、そしてこのことは作品の登場人物たちの間でなされる会話を、まるで劇場で舞台を目の前に座っているような感覚を読者に感じさせるような効果を生んでいるのだろう。4. 「位置と動き」のグループにおいては、類義語の動詞は非常によく保存されており、すなわちトレジアコフスキイはこういった意味を持つ動詞を排除してしまうのではなく、可能性を顧みてはそれらを用いていたということである。このグループにおいては「更新」という類義語の変更タイプの動詞の数は「削除」よりも7.5倍の量が認められる。この「更新」と「削除」の間におけるこれだけの大きな割合の差は、他のどのグループにおいても見られないもので、動詞のうち2つは削除され、15は全く新しく書き直されている。これは彼がより動きや動作を表現しようと努めということの意味するであろう。新版において動きでなく静的な位置を意味する言葉は削除され、登場人物たちの動作は

激しい動きで以て描かれているのである。5.「存在と不在」のグループにおいては、58の単語が保存されており、そのうち19語は類義語へと変更、それらのうち6語は完全な形で保存されている。類義語の動詞の保存あるいはそれへ変更に関しての、このような高い割合(1/3)はこのほかにはどこにも認められないものである。命令法の形をとる動詞 "отдать" は、このグループのなかでは特別な機能を持っており、すなわち新版においてこの動詞は二度、この命令法の形の保存で以て繰り返されている。類義語の変更タイプ(2a)においては、否定の無人称の形 "нет" の人称的あるいは名詞的な形の変更が認められ、その作用は、主体性を取り除き婉曲的な表現をつくっているといえよう。「叙述動詞」のグループには知覚の動詞と同じように、非常に少ない数しかなく、類義語の変更タイプの(1a)、(16)、(26)では叙述動詞は存在すらしていない。(2a)のグループには4語あるが、これはトレジアコフスキイが叙法動詞そのままでは用いておらず、その類義語的な単語は用いたことを意味する。または、新版において一行の長さの修正のために、それらを削除したり挿入したりする機能を持たせていたということであろう。これは詩的作品のシステムにおいてこうした些細な単語も重要性を孕むということを表し、技術的な役割を果たし得るのだろう。また一人称の動詞が他の形に替えられており、すなわち状況のカテゴリーを用いた迂言法へと替わっている。(3a)と(36)のタイプにおいては全部で8語で、新しい単語は概ね少ししか付け足されておらず、また取り除かれる際には一人称の形は消えている。つまりトレジアコフスキイは叙法動詞を用いる際、主体性を取り除くよう努めたということであろう。今までに見てきたこれら動詞の特徴を挙げるとするならば、旧版では同一単語の重複が極めて頻繁に用いられていたが、新版ではそのような重複の使用がほとんど消えていること、また、接頭辞の積極的な利用が多く見られ、同語幹の単語の拡大が図られていることである。これは今日のロシア語に多く残っている事実からみて、18世紀標準語における語形成論の分野においても、トレジアコフスキイが果たした役割の大きさの証拠ともなり得るだろう。

こうして、18世紀という時代に存在していたロシア語に関するさまざまな問題を顧みつつ、本発表の題材である「ピョートル大帝の死に寄せる哀歌」をロシア語学的・文法学的観点から丁寧に見ていくと、また興味深い新たな発見がある。トレジアコフスキイの生涯をとおして、その「言語」は「前半期」と「後半期」に分けられ、大まかに捉えられる傾向が極めて強かったがしかし、トレジアコフスキイの「言語」を形態論的・統語論的・語形成論・または語彙などの小さなレベルに分けることなく、ただ単に「言語 (язык)」という単語で以て大きく一つにくくり読まれていたからにすぎない。本発表の題材である哀歌の旧版と新版を詳細に読んでみて考えられることは、トレジアコフスキイの「前半期」の「言語 (язык)」のうち「文法 (形態論・統語論)」は古典的であるが、「語彙」は新化が著しく、「後半期」の「言語 (язык)」はといえば、「文法 (形態論・統語論)」は新化が見て取れるが「語彙」は古語が多い、ということである。

パン関連語彙の分析から見たロシアの民衆生活

石川 あい子

ロシア語にはパンに関連した語彙が豊富に存在する。ここでパン хлеб というのは、穀物の粉 мука に水分を与えて調整した生地 тесто を成形・加熱した食品であるが¹⁾、これら хлеб に関連する豊富な語彙は農耕を主体としたロシアの農民の暮らしの中に根付いたものであり、その語彙を調べることで人々の暮らし、社会への理解を深めることができよう。ここではそのための хлеб 関連語彙の整理検討を試みた。

作業の出発点となる語彙の抽出には、1940年代以降 В.А.Ларин のもとで展開された広範な語彙研究のうち食物語彙を担当した И.С.Лутовинова によってまとめられた «Слово о пище русских» Спб.1997 を用いた。Лутовинова は古くからの文献資料、民俗描写に富む文学作品、さらに都市や村をまわっての聞き取り調査の記録などをもとに、ロシアの食物語彙の中でも特徴的なもの 500 弱をこの著作に取り上げている。このうち хлеб 関連語彙はそのほぼ 4 分の一を占めている。これらの語彙から派生語を整理し、次に一連の規則的な語形成による語彙²⁾を除外し、語源辞典や方言辞典³⁾の採録状況を参考に、ここで扱う基本的な хлеб 関連語彙を 37 に限定した。

まずこれらの語彙について辞書がどのように記述しているかをみるために、В.И.Даль の «Толковый словарь живого великорусского языка» (第 4 版 1904 年) と科学アカデミーの «Словарь современного русского литературного языка» в 17 т. (1950 - 66 年) を参照し食品としての хлеб の記述を主材料となる мука、тесто、その形、焼き上げ法といったパン製造の工程に従って整理した。これら辞書にはそれぞれのパン製品を特徴付けている点が挙げられるのであり、その検討に際しては、特徴づけとみなされない場合に記述されないということも考慮に入れた。

мука に関しては、блин のように小麦・大麦・燕麦・そばなど列挙しているものや пирог のように篩った上質の粉としているものもあるが、それ以外では小麦が際立って多く、より一般的に用いられたライ麦は単独で名を挙げられていない。тесто に関しては、発酵を表す言葉に кислый, квашенный, дрожжевой があるのに対して、発酵させないことを表すのはそれらの否定形でなく пресный であること、また、卵やバター、牛乳といった動物性の栄養価の高いもの сдоба を添加するかどうかで味覚にかかわると同時に暦による斎期に対応していること、などが記述からわかる。形には材料、調整法、焼き方などが結果として総合されており、記述も多様に

1) В.И.Даль Толковый словарь живого великорусского языка, 1863-1868(4-изд. 1904) —以下注の文中に Даль の詳解辞典と記す— には хлеб の意味として、穀物の取れる作物、刈り取られ貯蔵される穀物、粉を発酵させて焼いた食品、さまざまなパン製品、食物全般、皮なめし用の発酵汁、生活を支える仕事や地位と 7 項目設けている。本稿で取り上げるのは第 3,4 項の食品としての хлеб である。

2) 穀物名 -ик の形で粉名由来の хлеб 名称 (житник, пшеничник など)、詰め物名由来の -ик の形のピローク名称 (грибник, капустаик など) がこれにあたる。

3) Фасмер М. Этимологический словарь русского языка. Т.1-4. М. 1964-1973., Черных П.Я. Историко-этимологический словарь современного русского языка. Т.1-2. М. 1994., Словарь русских народных говоров. Вып.1-36. М. 1991-2003 (刊行中) - 以下に方言辞典と記す。上記辞書いずれにも記載がないものは基本語彙に挙げていない (беляш, круассан など)。

なるとともに、平板状、丸く大きい塊状、輪型・錠前型・編型など特定の形を持つグループの存在が見いだされる。形を最終的に決める加熱法には、熱湯処理や *сковорода* で *масло* を使うことなどが特徴となり、*печь* の炉床での伝統的かつ一般的な焼き方は記述としてあげられていない。この辞書の記述に現れない特徴づけの基準になっているパンをたどると、ライ麦をすっぽく醗酵させ *печь* の炉床で焼いた *черный хлеб* の存在がある。これが、最も狭義にとらえたときの *хлеб* である⁴⁾。

хлеб 関連語彙の相関図

見出された語彙のグループとしては、平板な円形の лепешка の仲間、この лепешка 状の тесто に具を包み込んだりのせたりして焼く пирог の仲間、丸く高く焼き上げる каравай の仲間、小麦の白い булка の仲間、その булка のうち、輪にしたりねじったりなどして特定の形を持つ калач の仲間があげられ、これらが互いに重なりをもっている。またこの図には基本語彙として取り上げた中にグループをなさない独特のパンの存在も見出される⁵⁾。

日常の食であり、儀礼にも多く用いられる хлеб には慣用的な言い回しが多くみられるが、それらを上述の語彙グループごとに検討することにより同類項を見出すことができる。例えば каравай は現在では食品としての具体的なパンというより儀礼的、象徴的な名称となっているが、諺などにみられる意味や用法にはこのグループの коврига、челпан、колоб に共通項が見出される⁶⁾。блин や пирог は追善や婚礼にともなう儀礼の名称ともなっているし、хлеб の語彙を含む諺に町と村の生活の対比や土地による主作物の違いが描きだされている場合もある⁷⁾。このように上述の語彙グループをさまざまな хлеб 語彙を含む表現とあわせて検討することで生活の中の位置をより明確にすることができるだろう。

以上、辞書記述をもとに本稿で整理検討した хлеб は、狭義にはライ麦を材料に酸味を生む発酵をさせて печь で焼き上げた черный хлеб を意味し、同時に、穀粒を挽いた мука を材料に тесто を調整し成形するというヴァリエーションの大きい食品の総称として多くの語彙を包含している。そこには、発酵の存在、粒食と粉食、小麦の白とライ麦の黒など日常に密接な問題が見出される。これら хлеб をめぐって時代的な変遷や、地域的な影響関係、祭りや儀礼、暦や斎とのかかわりを今後取り上げていきたい。

6) цельный「丸のままの」、непеченый「手をつけていない」と形容され、結婚に儀礼的に焼かれたり (С.В.Максимов «Куль хлеба и его происхождение»1873)、«Ковригу резать.»のように切ることが兄弟間で土地財産を分けることを意味したり (Даль の詳解辞典、方言辞典)、娘たちの遊戯や輪舞を каравай や колоб と呼ぶ地方がある (方言辞典) ことが例として挙げられる。

7) 後者の例として、「Нужда научит калач есть.» (Даль の詳解辞典)について、この калач は小麦のパンのことで、穀物不足からボルガ川を下って下流の穀草地帯の労働力となる人々には黒パンはめったに口にできないと馳走になると説明されている (С.В.Максимов «Крылатые слова» 1890) ことが挙げられる。

プーシキンとマゼーパ伝説

—『ポルタヴァ』(1829)のエピグラフ解釈—

角田 耕治

【0.『ポルタヴァ』のエピグラフ(バイロンによる)】

The power and glory of the war,	戦争の力と栄光 —これらを虚しく信奉する
Faithless as their vain votaries, men,	人間と同じようにあてにならぬもの— は
Had pass'd to the triumphant Czar.	勝ち誇るツァーリのがわへと渡った。

A. C. プーシキン(1799-1837)の歴史的叙事詩『ポルタヴァ』に掲げられたエピグラフは、ポルタヴァの会戦に勝利したピョートル大帝を謳いあげる讃辞になっている。ところで、引用元である G. G. バイロンの『マゼーパ』(1819)を貫いている一義的なイメージとは、荒馬の背にしばりつけられた青年マゼーパが野に放たれ、そのままどこまでも疾駆するというものである。バイロンの『マゼーパ』はいわゆる昔語りの形式をとっている。ロシアに敗れたカール十二世とマゼーパの一行が落ちのびてゆく途次、力つきて夜営に甘んじる。このとき老マゼーパが五十年前の出来事をカールに話してきかせるのである。プーシキンがエピグラフに選んだのは、マゼーパの回想が始まる前のほんの出だしの部分であった。回想は次のように始まる：ポーランド王の近習として仕えていたころのこと、マゼーパは宮廷の若い伯爵夫人とひそかに逢瀬をかさね、深く愛しあうようになった。やがてこれが夫である伯爵の知るところとなる。彼はマゼーパを裸にして野性馬の背にしばりつけた。一鞭くれると馬は縄をきって狂ったように駆けだした…

【1. マゼーパ(1639? -1709)とは何者か】

イヴァン・ステパーノヴィチ・マゼーパは北方戦争(1700-21)において影の立役者を演じたウクライナのヘトマンである。「ヘトマンシチナ」(1648-1782)とはペレヤスラフ協定(1654)によって事実上ロシアの傘下に入ったウクライナのカザーク自治国家をいい、その国家元首が「ヘトマン」である。ビラ・ツェルクヴァの富裕な家庭に生まれたマゼーパは、キエフのモヒラ・コレギウムを卒業後、ワルシャワに出てさらに学ぶ。そこでポーランドの宮廷にひろわれ、ヤン・カジミェシュ王の近習として仕える。このとき王の後楯をえてオランダに留学までしている。ウクライナに戻ってからは二人のヘトマンに仕えたのち、1687年にみずからヘトマンに選出された。このような前半生からは、マゼーパが選ばれたエリート文官であったといえるだろう。

プーシキンが『ポルタヴァ』の主人公のモデルとしたのは「ヘトマン期のマゼーパ」、それも北方戦争をめぐる最晩年のマゼーパである。この戦争では、当時無敵の「バルト海帝国」を誇ったスウェーデン王カール十二世とピョートル大帝がバルト海の覇権をかけて争った。このときヘトマンはロシアからの離脱をはかってははじめポーランドと内通、のちにはスウェーデンと同盟してロシアに叛旗をひるがえした。ピョートルが対スウェーデン牽制力とも特んだウクライナ・カザークが敵方に寝返ったのだ。北方戦争の帰趨を制したのが、1709年7月、ポルタヴァの会戦である。両軍全面交戦ののち、スウェーデンとウクライナ・カザークの同盟軍は惨敗、カールとマゼーパはオスマン・トルコ領内に敗走し、ほどなくしてマゼーパは生涯をとじた。

【2. マゼーパ・テキストの系譜】

マゼーパはスラヴ語圏をふくむヨーロッパの、主にバロック期からロマン主義期にかけて、多様なジャンルにおいて頻繁にモチーフとされた。ヨーロッパの文化史におけるマゼーパ表象には二つの系がある。ひとつは、バイロンに代表される、若きマゼーパの荒馬のエピソードにまつわるもの。もうひとつは、プーシキンのような老ヘトマンに取材したものである。ロマン的ないし神話的性格、多岐にわたるジャンル、汎ヨーロッパの三点が共通する特徴である。以下、「マゼーパ・テキスト」の源泉と傾向についてごくおおまかに素描する。

まずはヘトマン期のマゼーパをめぐる。その最初のテキスト群は、ヘトマン存命中からポルタヴァの会戦直後にかけて、お膝元のウクライナで成立する。I. オルノフスキー（1688、99、ca.1710）らによる頌詞（パネギーリク）、JL. タラセヴィチ（1695）らによる肖像画などがそれである。ただしつねに政治的な意味が問われたそれらの内実は一様ではなかった。ポルタヴァの会戦以後は、ロシアから「裏切者」のレッテルを貼られたマゼーパを作品のモチーフとすること自体がタブーとなる。

19世紀初めのウクライナ民族主義の復興を担ったハリコフ・ロマン主義、その最大の遺産ともくされる『イストーリヤ・ルーソフ（ルーシ人の歴史）』（1846）。および、すでに手稿段階のこれを吸収していたД. H. バンティシュ＝カメンスキー『小ロシア史』初版（1822）。後者は『ポルタヴァ』の史的ソースのひとつである。これらウクライナの史書に登場するマゼーパに関して重要なのは、ヘトマン期をめぐる史実としては確認できない逸話が採録され、保存され、あるいは展開したことである。ハリコフ・ロマン主義の血統を継いだのが「ウクライナ派」による一連のマゼーパものである。Д. I. チジェフスキーのいう「ウクライナ派」の射程はひろく、ウクライナの周辺で、それぞれの言語によって、ウクライナに取材した作品をあらわした作家をもひろいあげている。ポーランドのB. ザレスキによる叙事詩（1824）や当時ウクライナに国境を接していたオーストリア帝国にあらわれた諸作のほか、K. Ф. ルィレーエフの『ヴォイナロフスキー』（1825）や、『ポルタヴァ』もここに含めることができるわけだ。『ポルタヴァ』を原本としてИ. II. チャイコフスキーがオペラ『マゼーパ』（1884 初演）を制作したこともつけ加えておく。

荒馬のマゼーパに話を移そう。気性の激しい馬にゆわえつけられた若者が馬もろとも疾駆して傷つくというイメージとスピード感は、そもそもギリシア神話のヒッポリュトスの物語のなかに類似のアルケタイプが存在していた。このことに意識的であったかどうかはともかく、荒馬のマゼーパが西ヨーロッパでひろく認知されたにはヴォルテール『スウェーデン王カール十二世の歴史』（1731）におうところが大きい。ただし「荒馬」のイメージはヴォルテールが創出したわけでもない。マゼーパ伝説が西側に渡るにあたってはポーランド人貴族S. ポニャトフスキ（1676-1762）が介在していた。ヘトマンの失脚以降ほぼ18世紀をとおしてウクライナにおける新たなマゼーパ作品の不在という状況のもと、西ヨーロッパではヴォルテールを発端として荒馬のマゼーパの表象が増幅されてゆく。

荒馬のマゼーパにはもうひとつの典拠があった。マゼーパと同時代のポーランド人J. C. パセクによる『回想：1656-1688』（1690-95 執筆）である。先にふれた『イストーリヤ・ルーソフ』の例に似て、これも出版は1836年とおそいが、1800年をすぎたあたりからポーランドのマゼーパものに影響関係がではじめるので注意を要する。以下は推測にすぎないが、ポーランド時代のマゼーパにかような風説が短絡的に結びつけられた背景には一種のオリエンタリズムがあったのではないか。ポーランドから、かつてのいわば「植民地」でもあった「ウクライナ」や、「ウク

ライナ・カザーク」をみたときの差別的な視線である。

19世紀にはいつてヴォルテールを受けたバイロンがひとつの典型をうちだすと、これがバイロニズムの波とともにフランス・ロマン派のサロンへと渡り、H. ヴェルネ（1826）らの絵画から V. M. ユゴーの詩（1828 執筆）、さらには F. リストの交響詩（1851 作曲）へと媒体をかえてゆく。パリのシルク・オランピーク（オリンピック座）による曲馬劇の公演（1825-）が、この疾駆する荒馬というイメージの一元的な拡張に一役かったと考えられる。

ここまでは「荒馬」と「ヘトマン期」に分けてみてきたが、二項対立的な図式化の危険は中間項やいずれにも属さない項を見落としがちな点である。マゼーパ・テキストに関していえば、ポーランドの作品群がまさにこれにあたる。ポーランドはまた、「荒馬」の伝説発祥の地にして、マゼーパ伝説が西側に輸出されたり逆輸入されるさいに本家ウクライナとをつなぐ中継地の役目を担っていてもいた。具体例として、ポーランド・ロマン主義の J. スウォヴァツキ（1839）を挙げておく。

【3. 『ポルタヴァ』のエピグラフ、その文化史的な意義】

さて、B. Г. ベリンスキーから H. B. イズマイロフまで、ロシアのプーシキニストたちは『ポルタヴァ』のエピグラフをおしなべてピョートル讃歌ととらえ、これ以外の解釈の可能性には初めから無関心であった。エピグラフはマゼーパとは無関係、そこで謳いあげられているのがポルタヴァの会戦に勝利したピョートルなのは明々白々であるというわけだ。一方、А. ドウッコンはこのエピグラフが「ジャンルの構造における変更を示唆している」という。ただしこれはロシアの『ポルタヴァ』先行研究において議論的的となって尽くされたジャンルと文体をめぐる論点を当てはめたにすぎない。

では、「ロシア」の外にでて、マゼーパ・テキストの系譜という汎ヨーロッパ的なパースペクティヴに照らしあわせたときに見えてくるものはなにか。それはマゼーパかピョートルか、ではなく、荒馬のマゼーパなのかヘトマン期のマゼーパなのかという選択の軸である。ユゴーもプーシキン同様、みずからの詩『マゼーパ』にバイロンからのエピグラフを付した。「遠くへ！—遠くへ！—」という詩行である。マゼーパによる回想において象徴的に反復されるこの一行を引いたことで、ユゴーは荒馬のマゼーパの継承と展開を宣言したといえるだろう。これに対してプーシキンの場合、ポルタヴァの会戦におけるピョートルを引用したというより、「荒馬のマゼーパを引用しなかった」ことに意義があるといえる。論者はこのような事態をすべて「作者の意図」に還元しようとするものではない。しかしながらバイロンの叙事詩全体が戦いをおえた老ヘトマンが主人公である部分と、主人公によって回想される若き日のエピソードからなる入れ子型の二部構成であったことをふたたび思い出すならば、プーシキンは「ヘトマン期のマゼーパ」を引用したといっても過言ではないのである。

主要参考文献：

Измайлов Н. В. Пушкин в работе над «Полтавой» // Очерки творчества Пушкина.— Л., 1975.— С.5—124.

Ágnes Dukkon, "History and Characters in Puškin's Epic Poems: Poltava." *Studia Slavica Hungarica* 45 (2000) : 191-198.

Чижевський Д. І. Історія української літератури: від початків до доби реалізму.— Тернопіль, 1994.

Hubert F. Babinski, *The Mazeppa Legend in European Romanticism*, New York, 1974.

所謂「児童学批判決定」とろう教育の関連性に関する一考察

白村 直也

I はじめに

本報告は所謂「児童学批判決定」と当時(1920年代～1936年)ソヴィエトで展開されていたろう教育との関連性について考察することを目的としている。

ろう教育が抱える本質的な問題ともいえるものに「手話の教授」問題がある。ろう児にろう教育の枠内で手話を教授していくのか、もしくは自然-音声言語を教授(口話¹⁾法と一般に呼ばれる)していくのかという問題である。帝政ロシア、そしてソヴィエト政権初期に展開されていったろう教育の流れを概観してみるに、手話を教育から排除し、自然-音声言語を教授していく傾向が顕著に見受けられる。

1920年代後半のソヴィエトにおいて心理学、言語学、そして生理学等における「子供に関する」研究成果を持ち寄ることによって形成される児童学が多大な注目を浴び、浮浪児や文盲問題への社会的な注目を背景として活発な展開を示すようになる。その流れの中でL.S. ヴィゴツキー(1896～1934)はろう教育指針に関して児童学を媒体として提唱している。

II 「決定」、そして1938年、全ロシアろう教育者会議

周知の如く、L.S. ヴィゴツキーの思想、著作は1936年の所謂「児童学批判決定(正式には「教育人民委員部の系統における児童学的偏向について」(以下「決定」))以降タブー化されるようになっていく。全ての子供を研究対象とする児童学、そして児童学を通じてのヴィゴツキーの問題意識はろう教育における「手話問題」にも多大な比重を置いていた。心理学的、または言語学的にろう児、手話を分析することによって得られた彼の思想はろう児の全面発達を保障する教授システムの確立を志向し、耳が聞こえないという現象における社会的本質の主たる意味、同様に子供の高次心理機能の発達における発話や意思疎通の重要な役割に注目するものであった。その延長線上に彼は口話とともに手話をろう児の言語活動に組み入れるべきという結論を導き出している。それは従来の純口話法一辺倒のろう教育方針に疑問を呈するものであり、当時のろう教育従事者、研究者らの驚きを喚起させている。

そのような彼による画期的で斬新な思想は1936年の「決定」によりタブー化されている。しかし注目すべきはその2年後の1938年、全ロシアろう教育者会議にてヴィゴツキーの上述の結論を基盤としてろう教育指針が採択されているという事実²⁾である。そのような事実は当時のスターリン政権下でのタブー化が如何に厳格なものであったという点からすれば非常に考えがた

1) 口話法は、読話、発音/発語、聴能を三つの柱として、健聴の子供と同様に音声を介した自然なコミュニケーションによる言語能力の習得や思考力の向上を目指すものである。

2) 1938年全ロシアろう教育者会議の決議に関して「この大会はわが国における専門家達の長年に渡る研究の総決算となった。大会は純口話法の事実上の支配に終止符を打ち、(中略)耳に障害を有する児童の訓育の目的や課題に立脚し大会は教訓的原則を打ち立てた。児童の人格の全面的発達、口話や口語—論理的思考を基礎とした科学に基づく教授である。この原則の実現のために口話、そして補助的なものとして一手話の意思疎通手段の使用が提議された。」とし、また「1938年の全ロシアろう教育者会議の決定においては、ヴィゴツキー他の研究成果が基盤となって反映されている(Зайцева(1996,2000) стр.110)」。

く、同時に注目に値する。従って何故そのような決議採択がなされえたのか、という背景に関して筆者はソヴィエトラウ教育とヴィゴツキー理論間における①タブー化の強度、時期の「ズレ」②「要求の一致」という解釈を提示したいと考える。①に関しては

「児童学的偏向への批判は、(中略)やがてスターリン体制の強化とともに、学校の教育政策は次第に「教育は何でもできる」という教育万能論へ、(中略)「児童喪失性」と言う教条主義へと導かれていく。まさにその期間、ヴィゴツキーの思想は(中略)その全てが弾圧され、禁じられていたのである³⁾」

という記述から「児童学批判」決定の後の「タブー」化されていく段階＝スターリン体制の強化に比例して強まっていったといえる。従ってヴィゴツキーの理論が「タブー」とされた期間の設定に研究者の解釈の間で微妙な「ズレ」が生じるものと想定される。続いて②に関しては次のようなことが言える。当時の時代背景を見てみるに、第一次(1927年)・第二次五カ年計画(1933年)を通じて当時のソヴィエト(1920～30年代)においては工業的成長を特徴付ける一要素として、教育の発展が重要視されるようになる。工業的成長を成し遂げる上で教育における成果が多分に期待される状況は、職業上必要な知識を如何にして効果的に習得していくのかという問題を教育に投げかけている。1931年9月5日付全ソ連共産党中央委員会(ボ)決定「小学校と中学校について」の時点で「学校における教授が一般教育面の知識を十分に与えておらず、また(中略)読み書きができ、科学の基礎(物理、化学、数学、母国語、地理等)をよく習得した人間を養成する、という任務を満足できるほど果たしていないことにあると、中央委員会は考える⁴⁾」という指摘を受け、更に翌年1932年8月25日の共産党中央(ボ)における「小学校、中学校における学習プログラム、レジュメにて」によって純口話法、同時に教授に関する方法や手段の見直しが要求⁵⁾されるようになっていく。それらの指摘は従来の一貫した純口話法での教育、またそれを通じて職業準備(профессиональная подготовка)教育の実施、職業準備における一連の知識の習得の不具合を露呈させるものであった。しかしながら一方で当時のろう学校の実情を表す次の様な記述がある。

「ろう児の教師らは実際、授業の外や授業中であってろう児らが仲間同士手話を用いて会話している点に気づいていたのだ。それにも関わらず、多くの教育家等はあれこれの語の概念や意味の習得をより迅速にならしめるにも関わらず、執拗にろう児らが手話を用いるのを拒否した。この点が考慮されることなく、ろう児らは純口話法で学び続けたのであった⁶⁾」と当時のろう教育方針が硬直化していた事が伺え、「学校での学習の基本的部分は話す技術向上に向けられた。従って9年間の学習を経てろう児らは初等学校のカリキュラムにさえ到達することもなかった。子供の会話学習の結果は好ましくないものであった⁷⁾」と(聴覚における)欠陥補償に教育者らの注意は集中し職業準備における知識獲得に悪影響を齎していたのである。純口話法に固執した教育方針、それを通じての職業上のまたは科学的知識の習得の志向はろう児らの会話能力技術の未発達の上に更に職業準備教育を積み上げようとするものであった。その過程、口話一辺倒での

3) 中村和夫(1998)「ヴィゴツキーの発達論:文化・歴史的理論の形成と展開」146項

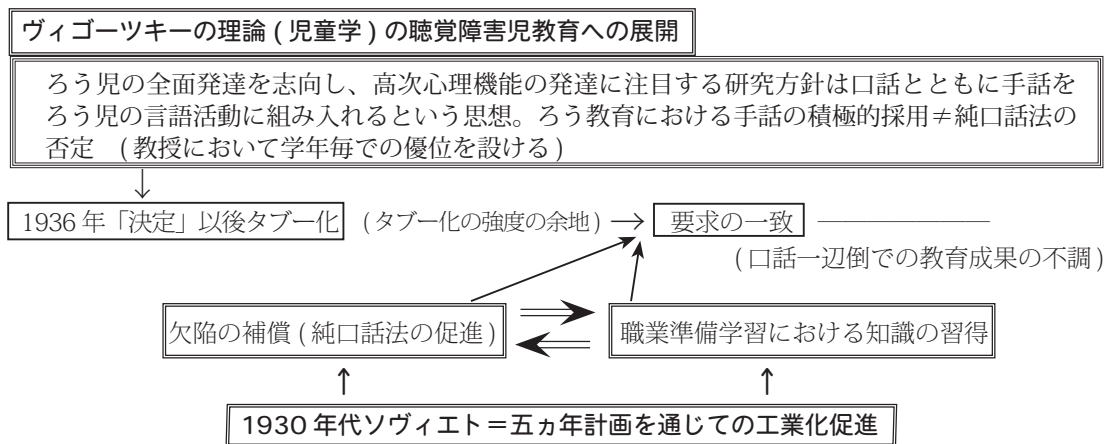
4) 渡邊健治(1987)「ソヴィエト知能遅滞児教育史研究Ⅰ－1920年代コンプレックス・プログラムの導入過程－」185項

5) А.Г.Басова(1984):История сурдопедагогики. стр248

6) Там же.,стр.246

7) Там же.,стр.245

不具合、そして限界性は同時に極端に排除され続けてきた手話の存在をクローズアップさせたと考えられる。もちろん、その不具合さは同時に手話がろう者間における意思疎通手段としてではなく、内的思考 (inner thought) の手段でもあるとされるヴィゴツキーの思想に一定の正当性を与えるものであったと考えられる。手話が内的思考の手段でもあり、またそれ (手話) を基盤としての二言語使用が客観的に見ても存在する現実であるとされ、またそのような状態は有効であり、ろう児の言語操作を有効にする目的で二言語使用を活用する、またそれを持ってろう児の全面発達、職業準備教育に有効な手段であるとするヴィゴツキーの思想が再度次第に注目を浴び、その延長線上の 1938 年会議決議採択であったと筆者は考える。以上を図式にしてみると以下のように記すことができる。



参考文献一覧

- 1 中村和夫 1998 「ヴィゴツキーの発達論：文化 - 歴史的理論の形成と展開」 東京大学出版会
- 2 渡邊健治 1984 「ソヴィエトにおける児童学批判の分析—教育困難児問題を中心に—」 東京学芸大学紀要 1 部門 35/ 東京学芸大学
- 3 А.Г.Басова :История сурдопедагогики Москва Просвещение 1984
- 4 Г.Л.Зайцева:ЖЕСТОВАЯ РЕЧЬ ДАКТИЛОЛОГИЯ МОСКВА ПРОСВЕЩЕНИЕ 1996
- 5 Г.Л.Зайцева:ЖЕСТОВАЯ РЕЧЬ ДАКТИЛОЛОГИЯ МОСКВА ВЛАДОС 2000
- 6 Л.С.Выготский :К психологии и педогогике детской дефекивности ВОПРОСЫ ВОСПИТАНИЯ МОСКВА 1924
- 7 Л.С.Выготский:Основы дефектологии Санкт-Петербург ЛАНЪ 2003

インターネットに於ける表記の問題

－ スラヴ語の場合 －

ミレン・マルチェフ

1. コンピューター技術の発展とインターネットの普及により、現在ではキリル文字で e-mail を送受信したり、オンライン掲示板やチャットに書き込みをしたりすることもできる。しかしインターネット初期にはキリル文字は使用できず、ローマ字 (ASCII コードの記号) のみによって表記されていた。現在でも、ローマ字による表記は依然優勢であり、インターネット初期に発達したさまざまな表記上の工夫が定着している様子が観察できる。以下に示すのは、そうした表記によるロシア語投稿文の例である。

例 1 : ya toje vo vsech mogu nayti nedostatki, oni u vsech est!!! no 4estno govorya ya starayus ne zame4at ix ina4e ya poterayu vsech svojix znakomix i друзей!!!! i e6e ya starayus zakrivat glaza na nekotoriye nedostatki, potomu 4to znayu 4to u mena oni toje est!!!!

(ウクライナの情報サイト http://www.gorspravka.kiev.ua/board_find.php より、表記は原文のまま)

(Я тоже во всех могу найти недостатки, они у всех есть! Но честно говоря, я стараюсь не замечать их, иначе я потеряю всех своих знакомых и друзей! И еще я стараюсь закрывать глаза на некоторые недостатки, потому что знаю, что у меня они тоже есть!) [参考のため、原文を生かしてロシア語表記を試みたもの]

報告者は、インターネットという新しい環境における言語行動分析のため、まずインターネット掲示板を対象に独自のコーパス構築方法を確立し、分析を行っている。修士論文では特に日本とブルガリアの場合を例に、新しい現象の観察・分析に取り組んだ。日本語については「2ちゃんねる」という特異な環境が興味深い現象を生み出していることが観察できたが、ロシア語同様キリル文字使用言語であるブルガリア語においては、上の例に見るような表記上の現象が問題の中心を成している。ここでは、ロシア語およびブルガリア語を例に、キリル文字使用言語の今後の変化につながる可能性のある現象について報告し、考察を加えたい。

2. 承知のように、一個のキリル文字に対し音声的に対応するローマ字がなく、複数のローマ字で表記しなければならないことがある。表 1 に示したようなものがその例である。

表 1	Ж ж	zh, j	Ъ ъ	a, u
	Й й	i, j, y	Ы ы	i, y
	Ц ц	c, ts, tz	Ю ю	ju, y
	Ш ш	sh, ch	Я я	ia, ja, ya, q
	Щ щ	sht (Bg. ¹⁾ , shch (Rus. ¹⁾)		

こうした複数のローマ字を重ねる方式は、実は異なるキリル文字使用言語間では勿論のこと、同じ言語の中でも表記法が定まっていないことが多い。そうした不統一が生ずる原因のひとつとし

1) Bg. はブルガリア語、Rus. はロシア語のことをさす。また、説明がないものは基本的に全てロシア語である。

て、投稿者が受けた外国語教育の違いがあるのではないかとされる。東ヨーロッパで主に学ばれる外国語は英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語であるが、これらのうちの言語を学んだかによる違いが、個人の選択する表記に影響を与えていると思われる事例が観察される。

B b: v (英式)、w (独式) Ш ш: sh (英式)、ch (仏式)

例2: "sdrawstwuite", "net wino ili piwo"

こうした不統一と、さらには、ローマ字入力の際にキーを複数回押す必要が生ずることから、多くのコンピューター利用者は、それに替わる、より「便利な」入力の仕方を求めるようになったと思われ、文字入力の省力化の結果と見られる表記方法が発達した。そのひとつがアラビア数字の利用である。

先の例1にも見られるように、オンライン会話においては、アラビア数字が文字の代わりに使われているのが観察できる。最も多く用いられるのは、「4」と「6」であるが、その選択は主に発音と思われる。これらの数字のスラヴ語の語頭の子音が、アルファベットの代用として利用されるのである。これらの数字を利用することによって、キーを押す回数が半分以上減る。また、一旦数字の使用が広まってある程度普及した結果、それが一種の流行になり、刺激となって他の数字の利用をも促した。キリル文字 з に対するアラビア数字の「3」は両者の形の類似を利用したもの、またキリル文字 п に対するアラビア数字の「5」は、「4」や「6」と同様に語頭音を利用したものである。さらに、ローマ字の q が、キーボード上の位置の一致故に я の代わりに使われる場合もある（この二つの記号の形も多少似ていると言えなくもない）。

表2

З з	= 3	(три)	Ш ш	= 6	(Rus.)、(Bg. は 6t)
Ч ч	= 4	("четыре")	П п	= 5	("пять")
Ш ш	= 6	("шесть")	Я я	= q	例: паси́q (нация) (Bg)

例3: "jizn eto to, 4to proixhodit, poka mi stroim plani na budu6ee...", "я 4увствую 4то ты о4ень симпати4на!", "5ar 100ianov" (Петър Стоянов)

ちなみに、このような数字の利用はオンライン・チャットなどで書くアラビア語にも見られる。しかし、アラビア語の場合は、すべては形の類似が元になっている（表3を参照）。

表3

数字によるアラビア語の表記

ح = < 7 > /h/ ; ع = < 3 > /ʕ/ ; ط = < 6 > /t/ ; ص = < 9 > /s/ ; ء = < 2 > /ʔ/ ;
خ = < '7 > /x/ ; غ = < '3 > /ɣ/ ; ظ = < '6 > /ð/ ; ض = < '9 > /d/

出典: David Palfreyman and Muhamed al Khalil. Zayed University, Dubai. "A Funky Language for Teenzz to Use": Representing Gulf Arabic in Instant Messaging. JCMC 9 (1) November 2003.

こうした数字の代用のほかに、入力の省力化に関する現象として、ロシア語、ブルガリア語のオンライン会話にはいわゆる英語の「Netspeak」の表現もしばしば出てくる。Netspeak は、英語の挨拶や慣用句など頻繁に使用される表現を、各語のイニシャルだけつなげて表記したり（例: lol = laughing out loud）、asl = age sex location、ty = thank you）、発音に注目した簡略な書き方である（CUI8r = see you later など）。インターネットはもともと英語の世界から始まっ

たものなので、英語の影響力が非常に大きい。こうした Netspeak 用語は英語のインターネット世界で発達したものであり、英語でなければ理解されないものが中心であるが、スラヴ語のインターネットにおいても使用されている。

ローマ字を使うことが多くなったとはいえ、やはりキリル文字の使用は根強い。場合によって投稿者がローマ字の文章のなかでキリル文字の雰囲気を作り上げようとすることもある。そういう場合、キリル文字とローマ字・数字の形の類似が巧妙に利用される。文字によっては大文字・小文字の一方のみ類似することもあるため、文章のなかに大文字と小文字が混ざることもある。

b (=ь), C c (=с), g (=г), P p (=р), m (=м), n (=н), Y y (=у), X x (=х),
U u (=и), B (=в), H (=н), M (=м), T (=т), 3 (=з), 6 (=б)

例4 : "jizn eto to, 4to proisxodit, poka mi stroim plani na budu6ee. "

これよりさらに変則的な使用法として、ASCII コード記号の組み合わせによるキリル文字形のイミテーションも行われている。ただし、そうした組み合わせを入力するには時間がかかるので、オンライン会話の文章そのものよりも、投稿者のハンドルネーム（投稿者名）に使われることが多い。

Пл, ІІІ = ПІІІ; П, ІІ = ПІІ; ЬІ = ЬІ; ЛІ = ЛІ; ІО = ІО

例3 : Хорошo_o4eHb (хорошо очень), CEPblu_BOJIK (серый волк),
My3b1KaHT (музыкант), HuKoMy_He_gAM (никому не дам),
КрасуBblu_CJIOH (красивый слон), XPAHyTEJlb_TbMbI (хранитель тьмы),
IOJIEHbKA (Юленька), ІІPuЗpAK (призрак),
k_o_ІІІ_k_a (кошка), CO6AK_JIYHHbIU (собак лунный)

3. オンライン会話の出現によって、表記法だけでなく言葉の形自体にも新しい特徴がみられるようになった。インターネットの掲示板やチャットには、もともと「話すように書こう」という雰囲気があり、スラヴ語も例外ではない。その結果下の例6のような表記が多用されるようになっている。また、英語話者が多用するそうした口語的表現がそのままの形で取り入れられることも多い。例7のようにキリル文字に転写して書かれることもあれば、そのままローマ字で書くこともある。

例6 : щас = сейчас, нехош = нехочеш, тож = тоже, эт = это
"ну все таки ... ну... один ...мааааленький ... "; "ti scas doma? "

例7 : хай / hi, сенкс / thanks, сорри / sorry, ок / ok

以上観察したような新しい表記や表現はインターネット利用者の何らかのコミュニケーション・ニーズを反映したものと思われる。インターネットという若い媒体においては、入力技術と言語表記法は常に積極的な相互作用関係にある。利用可能な記号やソフトウェア、ハードウェア（キーボード）の仕組みは、文字によるコミュニケーションのあり方を左右するものだが、社会の媒体に対する要求はソフトウェア²⁾と、(長期的には) ハードウェアのデザインにも影響を与え

2) 既に「Cyrillic Transliterator」など、ローマ字を自動的にキリル文字にするオンラインソフトウェアが登場している。

るはずである。

インターネット環境に焦点を当てたこのような研究はまだ方法も確立しておらず、手探り状態ではあるが、この新しい言語環境がスラヴ諸語の変化につながる可能性も大いにあり、今後もデータベース構築を続け、分析を深めて行きたいと考えている。

参考文献：

Crystal, David 2001. Language and the Internet. Cambridge
Jansen, Erin. 2002. NetLingo The Internet Dictionary. NetLingo. <<http://www.netlingo.com/>>
Kirova, Lyudmila 2001a Digraphia in the writings of Bulgarian Internet Users. LiterNet
< <http://litternet.bg/publish3/lkirova/digraphia.htm>>

例を採取したオンライン掲示板のウェブ・サイト：

ロシアのチャットサイト <<http://www.chat.ru/>>
ブルガリアの掲示板サイト <<http://clubs.dir.bg/>>

ブーニン研究の可能性を求めて

宮川 絹代

ブーニンの文学に関する先行研究の傾向を見ると、宗教的思想的議論や、リアリズムモダニズムを対極に据えた上での位置づけの試みが目立つ。そうした方法の可能性を問うところからブーニン研究は始まる。ブーニンを何らかの文学的、芸術的潮流の枠組みで論じたり、その作品から特定の宗教的、哲学的思想を抽出することは危険である。多くの先行研究は、個々のテーマが持つ問題のあらゆる側面を明らかにしてきたが、同時に複雑に交錯したブーニンの世界を一定の枠組みに固定してしまう傾向が強かった。そこで、様々なテーマを個別的に検討するのではなく、ブーニンの全創作の軸となる根源的問題である記憶とエロスを通して、「全体的に」¹⁾その文学を捉えるところにブーニン研究の新たな可能性があるのではないかと思われる。

そこで記憶とエロスという二つの一見異質のテーマを、時間という観点からひとつの問題として検討してみたい。その時間とは、生き生きとした現在であり、「始まりも終わりもない」²⁾時間であり、記憶とエロスというテーマにおいて具現するのである。

まず、ブーニンにおける記憶は、個人の記憶に留まらず、個の中における全体の記憶の覚醒にまで広がってゆくという特徴を持っている。そうした記憶の特徴は哲学的詩的散文『夜』に顕著に現れている。この作品では、チュッチェフ的伝統に倣って「夜」の世界が「昼」の世界と対比させて描かれている。そこでは夜の神秘主義の世界から出発して、無尽蔵の神秘を内包する生が讃えられるが、その神秘の根源にあるのが「イメージ的（感覚的）記憶」³⁾と呼ばれる記憶なのである。

『夜』における記憶という問題に関して、しばしば論じられるのは仏教的要素である。その根拠は記憶が輪廻転生に基づいて語られるところに求められる。ブーニンが仏教からある種のインスピレーションを得たというのは紛れもない事実であるが、そこには検討しなければならない問題がある。

ブーニンは、輪廻から靈感を得た果てしない生の神秘を「夜」の世界として詠い上げる一方、「コヘレトの言葉」からの引用を多用しながら、無味乾燥で空虚な日常的世界を「昼」の世界として対照的に描く。「昼」の世界は時間と空間の中にあり、地上の義務を遂行し、地上の存在に仕えるときである。対する「夜」は「時間と空間の奴隷がある期間自由になり、そのこの世における使命や名前、肩書きが取り払われる」⁴⁾時であり、それは個の中における全世界の目覚め、個の「全的存在」との合一⁵⁾へと導く。

輪廻転生に基づくその個と全世界、「私」と祖先たちとの一体感は、非終末論、この世の生の哲学、絶え間なく変化する意識の超論理的領域への関心といった特徴において、ブーニンの仏教的要素を重視する見方の根拠となりうるのは確かである。実際、仏教の唯識思想と比較すると、類似性

1) Адамович Г. В. Бунин // Одиночество и свобода. М.: Республика, 1996. С.39.

2) Бунин И. А. Собрание сочинений в девяти томах. М.: Художественная литература, 1966. Т.5 С.300, Т.6. С.7 (同作品集からの引用は、以下巻数（ローマ数字）および頁数（アラビア数字）のみ記す。）

3) V, 302

4) V, 300

5) V, 302

を指摘することは可能である。しかし、そうした個と全体の関係には、実は、西欧のキリスト教とは一線を画す東方正教思想との類似性も存在するうえ、プーニンの仏教理解には、輪廻の中に記憶による永遠の生の可能性が見出されるという本質的な誤解がある。本来輪廻が生死の繰り返しを意味し、涅槃がそれを超越した境地であるのに対し、プーニンの生と死は、超越的な記憶の有無によって分かれたるのだ。つまり、世界の神秘を語るのに用いられるインド的仏教的概念が示すのは、仏教思想への傾倒ではなく、むしろロシア正教やそれに基づくキリスト教哲学からの解放への希求だと思われる。

それに対して、インド哲学的概念が異国趣味的に彩る表層を取り払い、『夜』で詠われる神秘的体験の本質を抽出すると、それは、きわめてベルクソン哲学と類似していることが明らかになる。『夜』の叙情的断片に描かれる全宇宙的調和の世界は、意識によって生きられる持続を描き出し、空間の物理的外的世界と無尽蔵の記憶という流れる内的時間とが融合する、いわばベルクソンの知覚における心身結合を詩的に表したものと見える。さらに、個々の人間が持つ記憶の潜在性は、それよりさらに深い潜在性、すなわち宇宙からの分化として発生したものであるという点もベルクソンと共通する。そして、この世の生への愛情や情熱、創作行為への欲求、すなわち、ベルクソンのオプティミズムに根差す「生の躍動」といった点では、プーニンは仏教よりもベルクソンに接近するのである。このように『夜』における記憶は、プーニンの全宇宙との神秘的合一への希求とともに描かれる、この世の流れ行く生の中で味わいうる時空の超越という永遠の生なのである。

『アルセーニエフの生涯』でもこのような記憶について語られる。そこではさらにブルーストの「無意志的記憶」と比較しうるような瞬時性、偶然性、非連続性という特徴も指摘することができるが、そこからプーニンの記憶が「始まりと終わり」の否定を導く現在という内的時間に基づいていることがわかる。

プーニンにとって重要であったのは、何よりも生きた現世の時間であったということもうひとつのプーニンの中核的テーマであるエロスという問題を見るとさらに明白になる。この問題は、たとえば、悲劇的恋愛の物語『ミーチャの恋』から論じることができる。記憶が個の全世界への希求と言う形で現れるのに対し、エロスの欲求は個の他の個への希求である。しかしながら、プーニンにおける恋する主体ミーチャのカーチャへの恋では、対象である個は全世界へと変容し美化される。そのためエロスの欲求はイデア的世界への憧憬という外観をなし、そのエロスはプラトンやソロヴィヨフの思想の流れの中で捉えることができる。しかし、プーニンの場合、イデアや神的原理はアприオリなものとして想定されておらず、エロスの欲求は、個の全世界への希求と言う外観を成した、主体の個の無限の膨張であり、最終的な美の世界への飛翔はありえない。そうしたプーニンのエロスは死とある種の類似性を呈している。どちらも「すべて」を支配する力を持ち、日常的な主客関係を破壊し、非継続的瞬間に現れるのである。そのようなエロスの特徴は『アルセーニエフの生涯』の中で語られる恋愛の体験がよく示している。プーニンは恋に落ちるその瞬間性を強調する。それは「時間の消滅」とも呼ばれる。そして、「時間の消滅」⁶⁾に始まった恋の終わりは、主人公「私」の中で感覚的なものに溶けていってしまう。つまり、エロスは「時間の消滅」という瞬間に現れ、感覚的幻想の中に曖昧に消えてゆくのみで、「始まり」や「終わり」とは異質の瞬間である。

6) VI,185

このように見てくると、生の肯定の源である記憶とエロス、ブーニンにおいて、時間という共通の文脈で語られうるということが明らかになってくる。記憶は、知性を超えた、瞬間に現れる継続性の原理である。また、エロスは「時間の消滅」という絶対的瞬間として語られる。つまり、記憶もエロスとともに、時間的超越性を本質とし、「始まりも終わりもない」ブーニン独特の世界のなかで生きた内的な時間原理となっているのである。

そのような記憶とエロスが、真に時間性を克服するための受肉として、文学的空間の創造を考えることができよう。多くの同世代の亡命作家と異なり、ブーニンは故郷からの物理的断絶を克服するための精神的支柱をロシア正教の霊性には求めなかった。ブーニンにとっての神は、記憶やエロスのようなこの世の神秘と同等のものでしかない。そうしたすべての地上の神秘に永遠の生命を与えるものが言葉という肉体であった。ブーニンにとって言葉に刻まれない物事は死であり、言葉に刻まれた瞬間は永遠の生を得る。創作行為は、喪失感のみならず死をも克服することを意味した。従来のブーニン研究は、その喪失感やノスタルジーを重視するあまり、ブーニンの、特に亡命後の活発な創作行為の本質を見過ごしてきたように思われる。

そして、そうしたブーニンの文学的世界は、時間認識に基づいて印象主義という曖昧な概念によって位置づけることができる。また、印象主義は主観と客観の交じり合う地点に、絵画性と音楽性の融合した新たな芸術的表現の可能性を求めたものと考えることができるが、その点においてもブーニンの文学と一致する。ブーニン文学を印象主義という観点から検討することは、主客二元論に基づいたリアリズムかモダニズムかという議論から、ブーニンを解放することになる。さらに、ロシアでは、個と全体、主観と客観の緊張関係における独自性と相俟って、印象主義は時代という概念の中では決して位置付けられない、極めて重要なその哲学的文化的特徴を表している。そのことを考慮すると、印象主義という文脈でブーニンを語ることは、ブーニン論の枠を超え、同時代の文学、あるいはロシア文学そのものを捉えてゆく試みのなかでも非常に大きな意味を持つものだと思われるのである。

以上、本稿で論じてきたことは、ひとつの研究結果であるが、それは同時に今後のブーニン研究がどのような方向に展開してゆくことができるのかという可能性をも示している。今回、あえて「ブーニン研究の可能性を求めて」という題のもとに議論したのは、そうした可能性重視の立場からであることを最後に補足しておく。

主要参考文献

- Адамович Г. В. Одиночество и свобода. М.: Республика. 1996. Бунин И. А. Собрание сочинений в девяти томах. М.: Художественная литература, 1965-1967.
- Иван Бунин. Pro et Contra. СПб.: Издательство РХГУ, 2001.
- Мальцев Ю. В. Иван Бунин 1870-1953. М.: Посев, 1994.
- Соловьев В. С. Смысл любви // Мир и эрос: Антология философских текстов о любви. М.: Издательство политической литературы, 1991. С.274-305.
- 『ブッダのことば スッタニパータ』中村元訳、岩波文庫、1984年
- プラトン『饗宴』久保勉訳、岩波文庫、1952年
- ベルグソン『ベルグソン全集』白水社、1965年

ドストエフスキー『貧しい人々』と ロシア・センチメンタリズム

近藤 大介

1. はじめに

Ф.М. ドストエフスキーの作家第一作となった『貧しい人々』がセンチメンタル小説を意識して書かれた作品であることはこれまでの先行研究でも度々指摘されてきた¹⁾。そのため本稿のテーマそれ自体は目新しいとはいえないかもしれない。しかし従来の研究はセンチメンタル小説の持つ作品的価値があまり認められないまま行われており、従ってセンチメンタリズムが『貧しい人々』の中で重要な役割を果たしていることは認められていない。例えば、『貧しい人々』がH.M. カラムジンのセンチメンタル小説『哀れなリーザ』のパロディー作品であることを指摘する研究者は多いが、その場合のパロディーの手法は作品に表面的なおかしみを加えるだけのものと理解され、結果としてセンチメンタル小説が矮小化されていることは否めない。

このテーマについての問題設定で重要なのは次の点である。それは、これまでは構造的脆弱さや思想性の希薄さが指摘されてきたロシア・センチメンタル小説を見直し、その文学的特徴と後代のドストエフスキー作品との相関関係を明らかにすることである。ここではロシア・センチメンタル小説を代表する作品としてカラムジンのセンチメンタル小説を取り上げる。これらは主題や形式においてロシア・センチメンタル小説の一つの規範になったと考えられるからである。

2. ロシア・センチメンタル小説における「感じやすい人間」(чувствительный человек)

『哀れなリーザ』のリーザの物語はモスクワのシーモノフ修道院が舞台になっている。実在するロシアの土地を小説の舞台に選ぶことはカラムジン以降のロシア・センチメンタル小説に共通する特徴であり、この点で『哀れなリーザ』はその先駆的作品であった。架空の場所でもなく異国の見知らぬ土地でもない、読者に馴染みのある土地は単に物語をリアルなものにするだけでなく、読者がその土地を通じて物語や作中人物に感情移入することの手助けとなるのである。さらに大事なことは、読者だけでなく作中人物もまた土地や自然に愛情や愛惜の念を抱くことである。感情を込めて自然やその土地の風景を眺めることはロシア・センチメンタル小説のモチーフの一つになっていて、その典型的な例がモスクワ郊外の風景を描写した『哀れなリーザ』の冒頭部分である。物語の語り手は丘の上から見渡せるモスクワ郊外のパノラマを美しく描いてみせた後、

1) 先行研究の中でも詳細な分析を行っているものとしては次のものがある。Виноградов В.В. Роман Достоевского «Бедные Люди» на фоне литературной эволюции 40-х годов / В кн. Поэтика русской литературы, М, 1976 ; Тюнькин К.И. Романтическая культура и ее отражение в творчестве Достоевского/ В кн. Романтизм в славянских литературах, М, 1973 ; Щенников Г.К. Эволюция сентиментального и романтического характера в творчестве раннего Достоевского/ В кн. Достоевский: материалы и исследования Т.5, Л, 1983 ; Жилиякова Э.М. Традиции сентиментализма в творчестве раннего Достоевского, Томск, 1989
また、ドリーニン『書簡集』へのコメンタリーの中で、「センチメンタリズムの水脈は『カラマーゾフの兄弟』に至るまでの全創作を貫いている」と述べている。см. Достоевский Ф.М. Письма Т.2, М, 1930, с.493. ちなみに『貧しい人々』のセンチメンタリズムを最初に指摘したのはドストエフスキーの同時代の批評家アポロン・グリゴリエフである。

シーモノフ修道院へと視線を転じる。そして語り手は修道院の歴史を想像しながらも最後に、「しかしなんといってもリーザの、哀れなリーザの惨めな運命の思い出が、私を修道院の壁の方へと向けさせるのだ！」²⁾と慨嘆し、リーザの物語を語り始める。

ロシア・センチメンタル小説の主人公たちはみな、特定の風景や自然を豊かな感情で享受する「感じやすい人間」(чувствительный человек)である。そしてこの感じやすい人間は自分以外の他者の苦しみに対しても繊細な反応を見せる。次に引くのは『エヴゲニーとユーリア』の一節で、息子のエヴゲニーと養女のユーリアの幼年時代を母親が回想する場面。「谷間に出ると、疲労と暑さで息をするのも精一杯の老人が草むらで横になっていたんだよ。するとおまえはすぐに、その人の方へと駆け寄ったんだ。そして帽子を取って水を汲むと、老人の所にきてね、水を飲ませて顔についた埃を洗い落としてやったんだよ。ユーリアも自分のスカーフでその人の顔を拭いていたねえ。ああ！そんなおまえたちの心の優しさ(чувствительность вашего сердца)を見て、わたしはどれだけ嬉しかったか！」³⁾ここでの< чувствительность >は「鋭い感受性」という一般的な意味からさらに踏み込んで、より具体的に心のあり方や性質を指し示す「同情心や思いやり」のことである。ロシア・センチメンタル小説での< чувствительность >は特別な意味、人間としての美德を表しているのである。

3. 「貧しい人々」と「感じやすい人々」

ロシア・センチメンタル小説は「感じやすい人々」、つまり極度に感性の強い人間を描き、それを人間の美德として提示した小説であった。ドストエフスキーの『貧しい人々』と『哀れなリーザ』とのタイトルの類似性は単純なパロディーを超えた意味が込められているが、その< бедный >の意味的関連は「貧しい人々」(бедные люди)が極度に感性の強い、時に自意識過剰な人々として描かれていることにある。『哀れなリーザ』において< бедный >は専ら不幸な、哀れな、という経済的貧困を意識しない意味で用いられていたのに対し、『貧しい人々』の< бедный >はより多義性を帯びているのである。8月1日の手紙でジェーヴシキンが貧しい人間を次のように説明している。「貧しい人間というのは、世間を見る目が人とは違っていて、往來を通る人々をはすかに眺め、きまり悪そうに周りを見回しては、他人のどんな言葉にも、あれは自分のことを噂しているんじゃないか、と耳をすまして聞いているのです。」⁴⁾ここでの貧しい人間は、他者の存在を過度に気にしては気を病む人物で、経済的な貧しさによって心を病んだ人間のことが語られているのである。しかしドストエフスキーは『貧しい人々』において経済的貧しさによって他者の存在を過度に気にすることが同時に他者への思いやりや同情心の強さにもなり得ることを示そうとしたのである。そのようにジェーヴシキンが他者への同情を包み隠さず率直に語っているのが9月5日の長文の手紙である。そこでジェーヴシキンは往來のシャルマンカ弾き、物乞いをする子供、同じアパートに住む貧しい官吏ゴルシコフに対して強烈なシンパシーを表明する。ジェーヴシキンは周囲の意地悪い噂話に過敏な反応を示すが、また「感じやすい人間」として周囲の不幸にも過剰に心を寄せるのである。彼は「貧しい人々」であり、そして何より「感じやすい人々」なのである。< бедный >に多義性を与え、ロシア・センチメンタル

2) Русская сентиментальная повесть, М, 1979, стр.95

3) там же, стр.91

4) Ф.М. Достоевский Полное собрание сочинений в 30-ти томах, Т.1, стр.68

小説に描かれた「感じやすい人々」を社会的コンテクストの中で描いたのが『貧しい人々』である。経済的貧しさ、過剰な自意識、他人への同情心、これらがジェーヴシキンの中で渾然一体となっているのだが、そのようなジェーヴシキンを「不幸な人」と指摘するのがワルワラである。

なんて不思議な性格をしているんでしょう、マカール・アレクセイヴィッチ。あなたはどんなことも強く心で受け止めすぎるんです。それだからいつでも誰よりも不幸な人（несчастнейший человек）になってしまうのですわ。＜……＞もし人のことをそんなに心で受け止めて、そんなに強く同情していたら、誰よりも不幸な人になるに決まっていますわ。⁵⁾

ワルワラはさらに、「誰もがあなたは善良な心を持っていると言いますが、わたしに言わせるなら、あなたの心はあまりに善良すぎるのです」と書いて、善良な心の持ち主であるジェーヴシキンが、その思いやりや同情心ゆえに不幸な、哀れな人間になってしまうと指摘する⁶⁾。ここにおいて、センチメンタル小説で理想化された「感じやすい人々」が、貧しい人々、不幸な人々、と因果の鎖によって結ばれるのである。

ドストエフスキー作品の登場人物の多くは「感じやすい人々」である。そのことは後年の長編小説にも言えて、ラスコーリニコフやイヴァン・カラマーゾフはその多感な性質から自らに不幸や事件を招いたとも考えられる。その意味でドストエフスキーの全創作の特徴である感性の強い人間は、『貧しい人々』においてロシア・センチメンタル小説のモチーフを発展させ、同時代の社会的コンテクストに置きなおすことで新たに創造されたのである。

5) там же, стр.75-76

6) ドストエフスキーの初期作品における「心」の意味を論じたものとして次の論文がある。Топоров В.Н. О сердце ранних произведениях Достоевского/

ドストエフスキー病氣哲学の成立

—「意識は病である」ことの意味—

五島 和哉

1. 「意識は病である」とはどういうことか？

ドストエフスキーの『地下室の手記』における地下室人の独白、とくに「意識は病である」という発言はこれまで、二〇世紀的な近代主体批判、自我の不確定性の文脈で捉えられることが多かった。たとえばミハイル・バフチンは、地下室人の意識様態を「悪循環する自意識（対話）」と呼んでいる¹⁾。すなわち、近代的な意識主体はモノローグ的なものではなく、自己の内部に他者の言葉を孕み、はてしない内的対話をくり返すものであり、その様態を地下室人が「病」と呼んでいる、と考えたのである。しかし、「意識は病である」という発言そのものを見た場合、意識の様態について「病のようである」と言われているのではなく、意識そのものが「病」と呼ばれていることが気にかかる。この「病」を宿している主体とはいったい何者なのだろうか？一方、バフチンの意識観に対して、意識主体の身体、すなわち「無意識」の存在が欠如していることへの批判も存在する。たとえばマルコム・ジョーンズは、“Dostoevsky after Bakhtin”において、このバフチンの議論を基本的に継承しながらも、「ポリフォニーがカソフォニー（不協和音）になりかねない部分」、すなわち無意識の領域についても語る必要があるとして、ドストエフスキー研究に精神分析の方法を持ち込んでいる²⁾。しかし、エトキンドがバフチンの言語を中心とした世界観に、ラカンとの共通性を見出し、精神分析の新しい可能性を模索している³⁾ことから分かるとおり、バフチンの世界観における無意識の在・不在の問題（あるいは無意識が言語化されていること）自体は、地下室人の言説を考える上ではさほど重要ではなく、「意識という病」を宿らせる主体の問題を考えるためには、無意識とは別の視点が必要になる。

『地下室の手記』執筆中に書かれた、1864年4月16日のメモでは、現在時において墮落している人間が、自らの「我」を虚しくする（エゴイズムを克服する）ことによって、あらたな自然を獲得し、神の王国が到来するというキリスト教的な人間の歴史が語られている(20 172-175)⁴⁾。ここでドストエフスキーの言う「我」は、むしろ自意識の問題と無縁ではなく、『地下室の手記』の意識の問題についても、このキリスト教的歴史観の文脈で再考することが必要になるだろう。ここで参考になるのが、後の作品「おかしな男の夢」である。この作品においては、主人公の男が、墮罪前の楽園に「旋毛虫かペストのように как скверная трихина, как атом чумы」エゴイズムと羞恥心（＝自意識）を持ち込み、楽園が陥罪するというモチーフがあらわれる(25 115-116)。すなわち、「おかしな男の夢」では自意識＝原罪＝病というメタファーの連鎖が用いられている、ということになるだろう。『地下室の手記』における、「意識は病である」という発言が表すものは、近代的な意識主体の不確定性の認識のみならず、人間の自意識の原罪

1) Бахтин, М. Проблемы поэтики Достоевского, М., 1979, с.286, 272

2) Jones, M.V. Dostoevsky after Bakhtin, Cambridge University Press, 1990, p. XIV

3) Эткинд, А. Эрос Невозможного, Спб., 1993, с.401-408

4) Достоевский, Ф.М. Полное собрание сочинений в тридцати томах Л., 1972-90 本文中で言及したドストエフスキーのテキストはすべてこの全集に基づき、カッコ内に巻数、ページ数のみを記す

性でもあるということを忘れてはならない。

このような思想の源泉として、悪と善の絶えざる争いをこの世の「生」の根本と考え、悪を合目的化したシェリングの思想が考えられる。これは、シェリングが『人間的自由の本質』において、しばしば悪を病のメタファーで捉えることにもあらわれているもので、善悪の二元論を赦さないキリスト教において悪を根本的な存在とせず、人間の自然に与えられた「病」であり、治癒が可能なもの、とする思考法である。19世紀ロシアの思想、文学にシェリングが多大な影響を与えていることは周知の事実であり、ドストエフスキーとの関連を指摘した先行研究も幾つかあるが⁵⁾、ドストエフスキー自身がシェリングの著作に触れた痕跡はなく、どの研究でも直接の影響関係は指摘できていない。むしろ、坂庭淳史が論文「ロシア詩によるシェリング哲学の受容—愛智会からチュッチェフへ—」で指摘するとおり、ロシア詩が受容してきたシェリングの世界霊の思想と、その理想に反し自然の中で孤立する自意識のテーマをドストエフスキーが受容したこと、またシェリングアンであり、ドストエフスキー兄弟の雑誌「Время» «Эпоха»の有力な執筆者でもあったアポロン・グリゴリエフの批評、詩作品に注目し、文学史の伝統の中でのシェリングの間接的な影響関係を考えていくほうが妥当であると言えるだろう。

2. ドストエフスキー病気哲学の成立

このような観点から『地下室の手記』におけるドストエフスキーの意識の問題を考えていく場合、テキストの成立史を無視することはできない。『地下室の手記』が、チェルヌィシェフスキーの『何をなすべきか?』を意識して書かれたものである、ということは有名だが、「意識=病」の発想の源泉を探るためには、ドストエフスキー、チェルヌィシェフスキー両者の言説を、根本にある観念論と唯物論の美学論争から詳細に検討しなおす必要がある。これは、チェルヌィシェフスキーが1855年に発表した論文「芸術の現実に関する美学的諸関係」で、芸術をイデア、理想的な世界の実現とみる芸術観を否定し、「美は生である」とし、「芸術派現実の代替物であることに満足していればよい」と結論したことに端を発するものだ⁶⁾。この論に対しては、当初グリゴリエフらが反論を行っていたが、シベリアから帰還したドストエフスキーもやがて論争に巻き込まれ、『時代』誌上で反論を行うこととなる⁷⁾。そして、その集大成となるものが『地下室の手記』であったということが言えよう。

美学論に端を発するチェルヌィシェフスキーとドストエフスキーの論争には、いくつかの対立点が見られるが、その中でも重要なのは人間本性（человеческая натура）観の相違である。「哲学における人間学的原則」や「論争における美について」で表明されているように、チェルヌィシェフスキーの人間本性観は一元論的なものであり、霊的なレベルの存在を考えないが、ドストエフスキーの場合、前述4月16日のメモにも現れているように、現在の「病んだ」人間本性と、人間がエゴイズムを克服した先に獲得する、新しい天性（натура）を別々のものとして考えている。「神の本性は人間の本性の正反対にある」（20 74）「地上において人間は自らの自然と反対の理想を追求する」（20 75）、というようにこの新しい「天性」とは、人間がつねに目指して

5) Stammer, Heinrich "Dostoevsky's Aesthetics and Schelling's Philosophy of Art". Comparative Literature 7, pp.313-23, 1955; Белополюский, В.Н. «Достоевский и Шеллинг». Достоевский: Материалы и Исследования т.8, Л., 1988, с.39-51

6) Чернышевский, Н.Г. Полное собрание сочинений. М., 1939-1951, (Reprint in Germany, 1971) т.2, с.10, 90

7) Ряд статей русской литературы 第二論文（全集18巻70-103に所収）など

いる、神およびキリストの理想であり、のちに『カラマーゾフの兄弟』でゾシマが指摘するような、人間理性にとって不可知の領域（иные миры）に在る「事物の本質」（14 190）なのである。ゾシマの言では、人間がこの不可知の領域に接触するためには、キリストの理想に従うことで、我執を捨て他を愛することが必要であるとされる。すなわち、ドストエフスキーの思想の中には、エゴイスティックな「我（自意識）」を抱えた現在の本性が、「我」の克服をもって新たな本性に変容する、というキリスト教的自然変容のヴィジョンがあり、『地下室の手記』における「意識は病である」という発言は、このヴィジョンを背景としてチェルヌィシェフスキーの一元論的本性観を批判する意図を持ったものなのである。

このような「意識＝原罪＝（克服すべき）病」とであると考えた発想が、結果として近代主体批判を産み出していることを無視してはならないだろう。「意識＝病」の病氣哲学は『罪と罰』においても継承され、「ヒポコンデリー」ないしは身体症状をとともう熱病として描かれるが、ときに「悪魔憑き」のモチーフでも語られることは注目に値する（ネヴァ河のパノラマのシーン 6 50, 90）。また、この病から救済される方法は、エピローグのラスコーリニコフの救済に現れているごとく、大地と一体化して万民を愛するというキリスト教思想に一本化されるのである。

3. 病氣哲学の展開

以上のような文脈の中で、ドストエフスキーのその後のテクストを読めば、『悪霊』と『未成年』の間で、その病氣観に大きな変化が起こっていることが分かる。すなわち、『悪霊』までにおいては、『白痴』のイポリートに典型的なように、病氣が自己意識の孤立を促すものとして描かれているのに対し、『未成年』以後では、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマの兄マルケルに典型的なように、病氣が登場人物に自らの意識の原罪性を認知させ、自然とのハーモニーへの契機となり、世界を救済に導く、いわば「触媒」としての役割を持つようになる。ハーモニーの契機としての病氣は、『罪と罰』のエピローグで「大地との一体化」思想とともにすでに表れていたモチーフだが、ドストエフスキーの世界救済モデルとして非常に重要なものであるにもかかわらず、その後『白痴』『悪霊』といった作品では全く登場せず、『悪霊』のエピローグでもう一度登場するまで長い年月を待つことになる。この間、ドストエフスキーの病氣哲学はなんらかの試行錯誤の過程を経た、と言えるだろう。

以上のように、ドストエフスキーの「意識」観・「病氣」観は、かれのキリスト教的な世界観と密接に関連するものである。今後の研究においては、バフチンや精神分析の導入によって得られた成果を生かしつつ、近年ロシアでもその研究が盛んになりつつある宗教思想の文脈による分析が、有機的に結合されることが課題とされるだろう。

日本ロシア文学会関東支部規約

1988 年 10 月 5 日の総会にて承認

2001 年 9 月 29 日の総会で改定

- 第 1 条 本支部は日本ロシア文学会関東支部と称する。
- 第 2 条 本支部は日本ロシア文学会の会則に基づいて、その目的達成のために独自に次のような事業を行う。
- (1) 協同の研究ならびに調査。 (2) 研究発表会・講演会の開催。
- (3) 機関誌の発行。 (4) その他本支部の目的を達成するために必要な事業。
- 第 3 条 本支部は原則として、関東地方および新潟県在住の日本ロシア文学会会員をもって組織する。
- 第 4 条 本支部について次の機関をおく。
- (1) 総会 (2) 運営委員会
- 第 5 条 総会は本支部の最高議決機関であり、毎年 1 回開催するものとする。ただし、必要に応じて臨時総会を開くことができる。総会の議決は出席会員の過半数によって成立する。
- 第 6 条 運営委員会は支部長と運営委員をもって構成し、支部の運営にあたる。
- 第 7 条 本支部に次の役員をおく。
- (1) 支部長 (2) 運営委員 (3) 幹事
- 第 8 条 支部長は支部選出の理事の互選により選出する。
- 第 9 条 支部長は本支部を代表し、支部の運営を統轄する。
- 第 10 条 運営委員は、別に定める選出規定により選出する。
- 第 11 条 運営委員は、運営委員会を構成し、支部の運営を分担する。
- 第 12 条 幹事は、支部事務局担当大学選出の運営委員とし、会計・事務を担当する。
- 第 13 条 役員の任期は 2 年とし、重任を妨げない。
- 第 14 条 本支部の経費は会費、補助金その他の収入をもってこれにあてる。
- 第 15 条 会費に関する規定は別に定める。
- 第 16 条 本支部は、事務局をおき、本支部の会計および事務全般を委ねる。事務局設置の規定は別に定める。
- 第 17 条 運営委員会は毎年決算報告を作成し、総会の承認を求めなければならない。
- 第 18 条 本支部の会計年度は 10 月 1 日に始まり、翌年 9 月 30 日をもって終わる。
- 第 19 条 本規約の改正および諸規定、内規の制定・改正は総会の議決による。

支部規約に関わる規定

- 1) 第 10 条に関わる運営委員選出規定
支部事務局分担大学所属会員がそのなかから 1 名の委員を選出したのち、支部長とそれら委員が上記大学所属会員以外から若干名選出する。
- 2) 第 15 条に関わる会費規定
年額 1000 円とする。会費の改訂は支部総会の承認を要するものとする。
- 3) 第 16 条に関わる事務局設置規定
支部事務局は日本ロシア文学会事務局分担大学ならびに神奈川大学、埼玉大学、創価大学、千葉大学、筑波大学、東海大学、一橋大学、法政大学がもちまわりで適宜順番を決め、2 年ずつ担当する。

関東支部事務局は 2003 年 3 月から一橋大学に移り、2004 年末まで同大学が担当します。

日本ロシア文学会 関東支部報 第 22 号

2004 年 9 月 1 日 印刷 発行

発行者 井桁貞義

発行元 日本ロシア文学会 関東支部

発行所 〒 186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会学研究科 中島由美研究室気付

日本ロシア文学会関東支部事務局

TEL 042-580-8467

印刷所 〒 186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学生協